

博士學位請求論文の審査報告

一 論文題目 近代日中語彙交渉史の研究

二 提出者 劉凡夫（一九九三年三月東北大学大学院文学研究科博士課程国文学国語学日本思想史学専攻単位取得退学）

三 提出日 二〇〇六年十一月二十二日

四 学位審査日 二〇〇七年二月二十一日

五 口頭審査日 二〇〇七年二月二十一日

六 審査委員会 主査 教授 玉懸博之

副査 教授 田嶋一夫

副査 教授 大内和子

副査 東北大学名誉教授 加藤正信

七 学位の種類 博士（日本文学）

八 学位授与の要件 いわき明星大学学位規程 第四条二項

九 最終試験 審査委員会は、本論文の提出者は最終試験に合格と判定した。

十 人文学研究科委員会の議決 二〇〇七年二月二十八日

十一 論文審査の結果の要旨

本論文の提出者は次のような視点・方法をもつ。すなわち、日本・中国両国が近代の時期に、西洋列強の圧力に社会・文化の面でいかに対応するべきかという共通の課題を担い、それぞれの仕方で対応をなした―このような日・中近代史観に立ち、日・中間の語彙交渉をこの大きな歴史の動きに組み込んで捉えようとする。かかる視点・方法に立って提出者は、中国人の立場から、研究対象とする時期を日清戦争の終結する一八九五年から日中戦争の開始する直前の一九三六年までの間に設定し（この時期を、五四運動（一九一九年）を境にして、日本語彙の大量流入期と消化・吸収期とに二分する）、この間に日本から中国に流入した語彙について、その受容の時期、方法、定着までの過程を、語形・語義上の変化や近代中国語の語彙体系に及ぼした影響などに着目しつつ、究明しようとしている。その際、提出者は社会・文化的背景にも深く注意を払っている。

提出者は、言語現象を把握・分析する確かな眼識と手法とともに、言語現象を社会的・文化的動きと関連づけて把握する眼識と手法とを併せ持ち、これらの能力を駆使して、上記の二つの時期に中国に流入した日本語彙に関する多面的な様相をめぐって、その個々の様相について、さらには全体的様相について、従来の研究史に見られぬ新たな見解を形成・提示するとに成功している。

本論文において、①一九〇〇年前後の早期在日留学生たちによる日本語借用の実態、②代表的中国語辞書である『字源』（一九一五年）・『辞海』（一九三六年）にみられる日本語彙の定着と非定着をめぐる実態、③「 \wedge 教える人 \vee 「 \wedge 学ぶ人 \vee を表す語や接辞「者」をめぐる日・中語彙交渉の実態、などが、まったく新たな形で把握・提示されるにいたっている。

特に提出者が、近代日・中間の言語上の交渉は、一方向性の形ではなく、日・中両国間の相互交渉の形でなされた事実を、上記①②③の事例に即して実証的に把握し、もって中国に入つた日本語彙が中国語の近代語彙体系形成に大きな寄与をなした事実を近代中国の動的な歴史の動向に即して究明した点は、新しい研究の方向を示したものとして、研究史上の意義が大である。

口頭試問において審査委員から出された、①取り上げた資料の数はこれで十分といえるか、②各語が借用語だと見極める作業を具体的に説明してほしい、③借用語の実数を統計により示してあるがその統計処理方法の妥当性を示してほしい、④早期接触期、大量流入期、吸収・定着期という三区分別は学会でどの程度に認められているか、などの質問・要請に対し、提出者は的確にこれに応答した。

なお、厳密に言えば、本論文に関して、取り上げた資料数が果たして必要十分といえるかという点について、さらには日本語借用語と認定する手続きやその統計上の処理方法について、問題性を感じさせる面がなくはないが、これらは提出者にとつてさらには広くこの種の研究に携わるものにとって、ひとしく、今後解決しなければならぬ事柄としてあるといつてよいであらう。

以上から、本論文の提出者は、博士（日本文学）の学位を授与されるに十分な資格を有すると認められる。

「第一章本研究の姿勢と範囲」では、まず本論文の「目的」が示される。論者は、日本・中国両国が近代の時期に西洋列強の圧力に社会・文化の面でいかに対応するべきかという共通の課題を担い、それぞれにしかるべき対応をした―このような日・中近代史観に立ち、日・中間の語彙交渉をこの大きな歴史の動きの中に組み込んでとらえようとする。論者は、近代における日本・中国間の語彙交渉は、単純に一国から他国への影響という一方方向性でなされたのではなく、相互影響を含む、非常に複雑な様相を呈しつつなされたとした上で、本論文では、中国語の立場から、近代以降日本から中国に入ってきた語彙について、受容の時期、方法、定着までの過程を、語形・語義上の変化や近代中国語の語彙体系に及ぼした影響などを見定めつつ、究明する、その際、社会的・文化的背景との関わりにも注意を払う、と記す。

次に「近代」という時期の設定について、日本では明治維新（一八六八年）以降を近代とするのが常識であるが、中国ではアヘン戦争（一八四〇年）から二十世紀初めの五四運動（一九一九年）までを近代とするのが一般である、本論文ではアヘン戦争以後第二次大戦終戦（一九四五年）までを「近代」として扱うこととする、と述べる。ついで、この「近代」を、第一段階―一八四〇年から一八九五年（日清戦争終了）まで、早期接触期、第二段階―一八九五年から一九一九年まで、日本語語彙の大量流入期、第三段階―一九一九年から一九三七年（日中戦争開始）まで、日本語語彙の消化・吸収期、の三期に分かつ、と述べる。加えて、本論文が実際に考察を加える期間を、第二段階・第三段階（一八九五年から一九三六年まで）にしぼる、と述べる。さらに本論文で扱う資料と考察の順序とを記す。

「第二章日本語借用語の先行研究について」では、中国における日本語借用語の研究史を回顧し、これを踏まえて論者の本論文での目標を定める。

論者は、一九二〇年代・三〇年代の日本語借用語の研究が、個別的に過ぎ、また文明批評的傾向を帯びたものでしかなかった

た、終戦（一九四五年）後の一九五〇年代、研究は活況を呈するが、研究方法上なお難点を持っていた、その後政治的理由で研究は一時中断した、と記した後、一九八〇年代（改革開放後）日・中語彙交流の研究が本格化し、深化した、と説く。特に八〇年代の後半ことに九〇年代以降、日本における近代日本語成立の研究成果を吸収しながら、質量ともに発展して現在に至っている、と説く。個々の主要研究文献の成果と問題点にも言及する。

この記述を受けて、本論文は、従来手薄だった一八九五年以降の大量流入期および消化・吸収期を対象として、言語学的面の分析・社会文化的面の把握、この二点に注意しつつ、新たな考察をなそうとする、と記す。

「第三章近代日中間に於ける語彙交流の流れ」は、論者が後の章で個々の事例に即して研究の成果を述べる前の、表記に掲げた事項についての概説的な記述である。

論者は、早くアヘン戦争後の中国知識人層が、中国に旧来存した外国人蔑視の見地を改め、西洋文化の先進性の認識に立って、西洋文化を吸収すべく、洋学資料の中で西洋学術に関する訳語・新語の創出に努めた事実、ついで日本人知識人層がやや後の幕末・明治初期に、西洋文化を吸収すべく、先行する中国の洋学資料が載せる多くの訳語・新語を積極的に摂取し、やがて明治十五年頃から日本人自らが数多の、同類の新語・訳語を創出するに至る事実（近代日本語形成上の重要な事実）、その後日清戦争（明治二七・二八年、一八九四・九五年）後の一九〇〇年前後に、中国知識人層が（中でも在日留学生たちが）、旧来と違って日本の社会・文化を高く評価する見地に立って、日本人の創出したこの種の訳語・新語を積極的に受け入れ、このことがやがて新しい中国語の語彙体系の創出に連なっていく事実（近代中国語の形成に他ならない）などを記述する。日・中両国における近代語形成上の事実を、両国語間の相互影響に目配りしつつ的確にとらえている。

「第四章梁啓超『飲氷室合集』の日本語語彙―清末政体改革前後の資料を中心に―」は、梁啓超の『飲氷室合集』（一九三六年刊）所収の初期文稿（一八九六―一九〇二年に成る）を対象として、その含む日本語語彙の特徴を考察する。

論者は、二字以上の熟語に着目し、『合集』に見られる日本語彙を四二二語と認定する。

そして、梁が来日(日清戦争直後の一八九八年日本亡命)する前の著述ですでに七〇語の日本語彙を使っていたこと、来日後日本語彙をより積極的に受容して三五二語を使用するにいたったこと―このような興味ある使用実態を新たに指摘する。ついで、これらの語は、総じて、漢字字音語、抽象的な概念を表す語に富み、字音接辞・専門用語が多用されるなどの特色をもつとする。

加えて、梁の用いたこれらの語彙の現代中国語への定着率は非常に高く、現代中国で八四パーセントが使用されている、と報告する。

本章は、第五・第六章とともに、日清戦争後、戊戌政変(一八九八年)前後の、中国における日本観の変化に伴う、中国知識人層の日本語彙受容の実態とその意義とを、従来の研究成果を修正しつつ、的確に把握したものであり、その研究史上の意義は大きい。

「第五章『訳書彙編』の日本語彙―在日留学生の翻訳活動」と日本語彙の使用―」は、一九〇〇年に来日した留学生たちの作った翻訳団体の機関誌『訳書彙編』(一九〇〇〜一九〇三年)を考察の対象とする。同誌は新鮮な内容を持ち、留学生を通じて多くの中国知識人層青年に思想上の影響を与えたものである。

論者の借用語認定の手続きは、前章に準ずる。

論者は、この書の日本語彙を三七六語と認定し、この三七六語を①漢字表記の和語、音訓混種語、日本製漢語、あわせて二七六語(「原語借用語」と論者はよぶ)と②中国に逆輸入された語、あわせて一〇〇語(「回帰借用語」と呼ぶ)に分けてその受容の実態を記述する。

さらに、この書の翻訳者が、なじみのない日本語彙を中国人に理解させるために、日本語原典の学術語に付された解説を翻訳したり、日本語彙の後に小文字の中国語の説明を施すなどの工夫をしたりした事実をも紹介している。

加えて、同書に用いられた三七六の日本語彙のうち現代中国語に定着したものは、三一五語、八四パーセントにのぼると

報告し、その原因に論及している。

「第六章『日本遊学指南』の日本語語彙―在日留学生の著書活動と日本語語彙―」は、同じく中国からの早期留学生章安祥が一九〇一年東京帝大在学中に著した『日本遊学指南』を考察の対象とする。論者は前章までと同一の手続きによって本書における日本語語彙を一七八語と認定する。論者は、その一七八語を①中国古典に見えるがその意味が明治以後の日本で変化したもの、②中国古典に見えず、明治期日本の訳語・造語と見られるもの、に分類した上で、その一七八語について、専門語が多用されている、抽象的な概念を表す語が多いなどの特色を指摘している。

加えて、本書で使われた一七八語の日本語語彙のうち現代中国語に残ったのは一五六語、八五パーセントに達する、本書を含め初期留学生により借用された日本語語彙の中国語への定着率は非常に高い、との指摘をしている。

「第七章中国語辞書『字源』初版に収録された日本語語彙の性格」では、近代中国初の大辞書『字源』の初版（一九一五年）を考察の対象とする。

論者は前章までと同様の手続きによって、一八〇語を日本語語彙からの借用語だとする。そして、日本語語彙の借用の実態を、①意味分類の上から、②音訓・品詞分類の上から、③中国語との関係の上から、に分けて検討し、①について人文科学の語彙が多く採られたこと、②について訓読みの和語および宛字が他の資料より各段に多いこと、③については和語や和製漢語が多く収録されていること、などの興味ある事実を指摘する。

加えて、『字源』に収録された日本語語彙の現代中国語への定着率は三分の一弱に過ぎない事実を指摘し、その原因は、本書において日本語の採択・収録の基準があいまいであったことなどにあるだろうと推測している。

「第八章中国辞書『辞海』から見た日本語語彙の受容と定着―『字源』との対照を中心に―」は、近代中国辞書の集大成といえる『辞海』（初版一九三六年）を考察の対象とする。

論者は、『辞海』は近代中国における日本語語彙の受容のほぼ定着したさまを示すとみなし、その定着の実態を『字源』との対比を通じてとらえている。

論者は、『辞海』には七〇二もの日本語彙が収録されていると認定する。そして、そのうち五五〇語は当時中国語に定着していた、これらはほとんど一九世紀末・二〇世紀初め、在日中国人留学生たちの翻訳・著述活動を通じて中国に伝えられたもので、科学および文芸関係の述語が圧倒的に多くを占める、という興味深い指摘をする。

次に論者は、残る一五二語は、当辞書の説明の仕方から見て非定着語だと認定する。加えて、先行する『字源』に収録されながら『辞海』では削除された語として六七語を挙げる。そしてこのような日本語彙の非定着、消滅という現象の要因を言語学面および社会・文化面から探っている。

二十世紀の初めに中国に流入した数多の日本語彙のその後のいわば「運命」を多面的に鋭くとらえており、研究史に益するところが大である。

「第九章へ教える人Vを表す語の日中語彙交渉史」では、前の各章がまとまりを持つ文献を考察の対象としたのとは違い、個々の具体的語を考察の対象とする。

論者は、近代的意味でへ教える人Vを表す諸語(教師・教授・教諭・教員など)の形成・普及をめぐって日・中両国の間に興味ある交渉が存したとして、この点を実証的に明らかにしようとする。

論者は、近代的意味を持つ「教師」「教員」などの語は、早く中国の後期洋学資料(アヘン戦争後に成る)で使用されたが、一般には普及しなかった、洋学資料の含むこれらの語は、幕末・明治初期、近代教育制度を樹立しようとする日本人たちによって受容・使用された、そして明治二十年(一八八七年)頃以降の日本において、教育制度の確立とともに日本語に定着した、一方中国でははじめこれらの語は普及しなかったが、一九〇〇年頃の、日本における近代教育制度の形成に着目した在日中国留学生たちによって日本語から借り用いること(逆借用)がなされ、やがて中国の近代教育制度形成の努力に伴って次第に普及し、近代中国語彙体系に定着するにいたった、と説く。

本章は、日・中近代語の交渉史の重要な一面を動的かつ的確に捉えており、研究史上の意義が大である。

「第十章へ学ぶ人Vを表す語の日中語彙交渉史」では、前章同

様の手法によって表題のテーマを追及する。

論者は、日本の古代では漢籍に倣って「学ぶ人」を「学生」ほかの語で表現し、中世・近世でも引き続き漢籍に倣って「学者」「学徒」などの多様な漢語で「学ぶ人」を表現した、—このように近代以前における中国から日本への影響の大きさを説く。ついで、近代日・中間の交渉については、日本で幕末・明治初期に中国の英華辞書にみえる訳語を借りてさまざまの形で「学ぶ人」を表現した、その後日本では近代学校教育制度の確立に伴ってこれらの語は淘汰され、もっぱら「学生」「生徒」の語が使用されるようになった、一方中国では、清末までは「学ぶ人」を表す語彙は豊かであったが、近代学校の教育に關しては古い語は使われず、主に「生徒」を用いていた、日清戦争後は日本からの影響で、「学生」「生徒」が一時共存していた、二十世紀の十年以後、日本からの影響で、「学生」が上位語となり「生徒」ほかはその下に位する、「学ぶ人」の表現形が中国語に定着した、と説く。

加えて、「小学生」「中学生」「大学生」「留学生」「研究生」などの三字漢語はほとんど日本から伝来したものだ、と記す。

前章とともに、日・中の近代化への努力とそれに伴う両国間の社会・文化上の関わりないし交渉をも見据えつつ、両国間にみられた語彙の相互交渉の重要な一面を的確に把握している。

「第十一章近代漢語系接辞『者』の展開—日中間の語彙交渉を中心に—」では、日・中間の語彙交渉を、造語成分のひとつである接辞「者」をめぐって考察する。

論者は、幕末・明治初期の日本では、接辞「者」が中国の後期洋学資料の影響の下で、翻訳語として英和辞書に載せられ、翻訳書で用いられた、「者」は主に二字以上の漢語語基に下接していた、明治中頃から翻訳語に限らず広く日本語の造語接辞となつて、日本語に定着した、と説く。一方近代中国では、はじめ接辞「者」の使用はなかなか進まなかったが、一九世紀末・二十世紀初頭、在日留学生在が日本語に倣って翻訳・著述の中に盛んに用いるようになり、これが中国語における「者」の接辞化を強く推進した、はじめは日本で作られた語を借用していたが、一九一〇年以後日本の使用例にとらわれずに接辞「者」が多用されるようになり、さらに時代が進むと多くの三字新語の創出な

どを通じて、接辞「者」は中国語に欠かせない存在となった、と説く。

この章も、前二章とともに、近代日・中両国間の語彙の相互交渉の一面を的確に描きだしたものである。

「第十二章結語」では、第一章から第十一章までの考察をまとめるとともに、今後の研究課題を提示している。

論者は、それまでの記述を総括して、中国に入った日本語語彙は、中国語に刺激を与え、中国語の語彙表現を豊かにさせ、造語方法を多様化させたと同時に、中国語の近代語彙体系の形成に大きな影響を及ぼした、と記す。加えて、今後の課題として①魯迅、郭沫若ら著名な文学者の著作を対象にして日本語語彙の借用の実態を探ること、②近代中国の各種教科書を対象にして公的教育面での日本語語彙の導入・定着の姿を探ること、などをあげている。

この章の記述も、読む者を納得させるものになっている。